

4

[書評 | review]

吉田憲司『文化の「発見」——驚異の部屋から ヴァーチャル・ミュージアムまで』

Kenji Yoshida, *Bunka no Hakken: Kyoji no Heya kara Virtual Museum made*

池永禎子 | Sachiko Ikenaga



吉田憲司『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』
岩波書店 / 2014年1月 / 四六判 / 277頁 / 2,600円+税

本書『文化の「発見」』の初版は、1999年5月、岩波書店「現代人類学の射程」シリーズ全8巻のうちの一つとして出版され、今回「岩波人文書セレクション」として再刊されたものである。著者の吉田憲司氏は、国立民族学博物館教授（総合研究大学院大学教授を併任）で、専門は文化人類学および博物館人類学。吉田氏は本書により、第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）ならびに第1回木村重信民族芸術学会賞を受賞した。

初版において吉田氏は、美術史家ダンカン・キャメロンが1970年代初頭に提唱した「テンプルとしてのミュージアム（=すでに評価の定まった宝物を人々が拝みに来る神殿のような場所）」「フォーラムとしてのミュージアム（=未知なるものに会い、そこから議論が始まる場所）」という区別^[1]を引用した上で、これからのミュージアムには、ますますフォーラムとしての役割が求められるだろうと述べた。キャメロン自身は、ミュージアムのあり方についての区別を提示しただけで、必ずしもミュージアムの未来像を語ったわけではないが、吉田氏はこの「フォーラムとしてのミュージアム」にミュージアムの将来のあり方の鍵があるととらえた。その後の十数年間は氏にとってまさに「フォーラムとしてのミュージアム」を実現する過程であり、その成果は、国際共同巡回展「Self and Other アジアとヨーロッパの肖像」（2008年－2011年）、国立民族学博物館のアフリカ展示更新（2009年）および「武器をアートに ―― モザンビークにおける平和構築」展（2013年）といった、展示にあらわれている。人類学の視点から新たな博物館のあり方を提起した初版は、博物館人類学のマニフェストとしての意味をもっていただとがきで述べているが、これらの「展示」はまさにその実行・実践にあたるもので、こうした功績が改

めて本書への評価に繋がったといえよう。

文化の多元性とか、西洋中心主義の終焉といった議論が活発化する一方で、多くは、素朴な文化相対主義か、西洋礼賛を裏返しただけの西洋批判に終始しており、とりわけ「美術」や「文化」といった概念自体の中にいかに西洋中心主義的なまなざしが刻印されているかというような掘り下げた議論がなされることは少なかった。本書では、美術館、博物館などの西洋の制度がそのたどってきた歴史に沿って挙げられ、一見客観的な文化の展示にみえるこれらの制度の中で、異文化に対する西洋中心的な「まなざし」がいかに形作られ、またすり込まれてきたかが説得力豊かに語られている。この点は、人類学者らしい着眼点である^[2]。人類学は発見した「異文化」を完結した世界として記述し、博物館はそれを表象し再生産する装置として機能してきた。一方、完結されたものでも閉ざされた世界でもない「文化」を表象するとはどういうことなのか。評者が現在身を置く文化人類学の立場から論じられた博物館論を評することで、改めてアーカイブズ学の有用性を考えたい。

2 ―― 本書の構成

本書の最大の特徴は、一貫して民族学博物館と近代美術館との区別が問題にされていることである。これは、吉田氏がアフリカ美術の研究者であり、徹底したフィールドワークをベースとした仕事を身上にしてきたことにも起因すると思われる。本書は5つの章から構成される。

第一章「『異文化』の発見 ―― 民族誌展示の系譜」は、非ヨーロッパ世界の産物が、コレクションというかたちで、ヨーロッパの文脈に取り込まれていく過程を歴史的に跡付けたものである。「珍品陳列室」「驚異の部屋」の時代から、博物学的コレクションの形成、そして

民族学博物館や近代美術館の成立へのプロセスを検討している。それは、博物館・美術館という装置に着目して、近代における「異文化」像、そしてその反転としての「自文化」像の変遷を検証する作業でもある。先にあげた構成でいうところの第2項までは、いわゆる一般的な博物館成立史であるが、第3項からが民族学博物館の歴史にあたり、文化人類学との関連が強くなる。よって、登場する用語も文化人類学に特有のものが多い[3]。目に見える世界を分類し、整理しようとする博物学の衝動が、ヨーロッパ諸国による植民地進出が活発化した時期、ヨーロッパに大量に導入し始めた「異文化」の人間に対しても向けられることとなったという指摘は興味深い。やがて学として人類学が発生すると、その「教育」の装置として民族学博物館が誕生するという流れである。かくして民族学博物館は、主として西洋の側からみた「異文化」の人々の手になる「器物(artifact)」の収蔵と展示の場とされることになる。モノ(=器物)を通した「他者」の表象の場、これがすなわち民族学博物館の性格であり、最近まで継承されているのも事実である。一方、近代美術館は、ルーヴル美術館にはじまる西洋の「天才」たちの「傑作」、つまり「美術作品(art)」の収蔵・展示の場としての美術館の歴史の中で、もっとも新しく成立した機関である。同じ収蔵品が、近代美術館では「作品(object)」と呼ばれるのに対し、民族学博物館では「資料(material)」あるいは「標本(specimen)」と呼びならわされ、さらに「作品」あるいは「標本」につけられるラベルも、それぞれ異なったかたちで定型化されており、二種類の機関の間には差異化のための壁が立ちはだかっているという指摘にも同感である。こうした問題を浮かび上がらせるきっかけとして、1984年のニューヨーク近代美術館での展覧会「20世紀のプリミティヴィズム」を挙げ、この展覧会については第三

章を割いて丁寧に論じている。その第三章は、西洋が異文化に目を開くことによって自文化中心主義をのりこえることに成功したという、よく語られがちなストーリー自体の中に潜む根源的な偏見や差別的構造を浮き彫りにしており、高い評価を受けている[4]。

次に、第二章「近代日本における『自文化』と『異文化』の発見——『東博』と『民博』のコレクション」では、日本における「自文化」像と「異文化」像の変遷を考察しており、東京国立博物館(以下「東博」と国立民族博物館(以下「民博」という二つの機関に焦点をあてている。明治維新以来長きに渡って事実上唯一の博物館=美術館であった東博、そして今もって日本における唯一の国立民族学博物館(かつ吉田氏の勤務先である)である民博が、日本における「自文化」展示と「異文化」展示のかんりの部分を集約しているというのが主旨で、それぞれのコレクションと展示の形成過程をたどり、この二つの博物館の位置づけを試みている。東博については、「殖産興業」の観点から広範なコレクションの形成をめざし、ヨーロッパにおいておよそ200年を要したプロセスを、草創期の11年間で凝縮したものであり、その後わずか5年で帝室の博物館として「東洋古美術博物館」に特化していく道をたどったと批判的に述べている。すなわち、東博の早い時期における美術博物館への特化が、日本における博物学的コレクションの形成を不十分なままに終わらせる結果を招いたということである。「美術こそ一國文化の精粹である」という考え方が日本人の意識のなかに定着しているかに見えるとの指摘もなされている。しかしその一方で、こうした傾向は東博が生んだものというより、むしろ日本人の中にある潜在的な価値観が東博にそのような選択をさせたのかもしれないとも述べている。大阪万博という日本で初めての

地球規模の「異文化」接触の機会まで国立の民族学博物館がつけられなかったことへの憤りは感じられるが、そもそも本書の中でここまで東博と民博について対比させる必要があったのかは疑問である。東博が「国立博物館」と名乗りながら実態が美術博物館であること、東博の民族誌コレクションに陽の目が当たっていないことへの批判とも取れるが、ここには東博の自然史部門資料の移管を受けた現在の国立科学博物館を議論に加えても良かったと思われる。また、仮に東博が民族誌部門にも力を注ぐ文字通りの国立博物館であったら、民博は存在しなかったか、東博の分館にしかなりえなかったかもしれない。確かに日本の博物館の歴史は東博が基準を作り牽引してきたといえるが、後から生まれた館とのすみわけ、役割分担もそれなりになされてきたとは思える。民博も、東博がなしえなかった部分を専門的に担う唯一の国立館として対等に認め合い、補い合う。そういった発想が必要に思えるが、本書にはあらわれてこなかったのが残念である。

第三章「『異文化』と『自文化』の出会い——『20世紀美術館におけるプリミティヴィズム』展を考える」は、先に述べたニューヨーク近代美術館で1984年に開かれた「20世紀のプリミティヴィズム」展と、それが巻き起こした論争をとりあげている。人類の持つ芸術的能力の普遍性を示そうという意図のもとに、近代美術館所蔵作品と民族学博物館の所蔵資料、ヨーロッパやアメリカのモダン・アート作品とアフリカやオセアニアの民族誌資料とを一堂に集めたこの展覧会は、欧米の側が抱く「自文化」像と「異文化」像とのあいだの根深い区別を浮かび上がらせることになった。そして、この展覧会をめぐる熱い議論をきっかけにして、博物館や美術館における表象のありかたへの再検討の機運がたかまり、その中から

新たな展示の試みが芽生えていく。そうした動きの出発点として「20世紀のプリミティヴィズム」展を検討することで、現代における文化の表象の問題を浮き彫りにすることを狙った。

続く第四章「民族誌展示の現在——『異文化』と『自文化』のはざままで」では、その「20世紀のプリミティヴィズム」展以降、世界各地の博物館・美術館で展開されてきた民族誌展示をめぐる新たな試みを展望している。旧来の展示に欠落していた部分を補おうとする修正主義的な展示。展示という営みそのものを見つめなおそうとする自省的な展示。展示する者とされる者、さらにはその展示を見る者とのあいだの対話や共同作業を志向する展示。そして、文化の担い手による「自文化」の展示など、そこには多様な試みが見られる。ここにも、吉田氏の勤務先である国立民族学博物館で行われた自身の実践が論じられている。

これら一連の批判的検討をもとに、最終章「次代のミュージアムに向けて——ささやかな提言」では、ミュージアムのあり方についてのひとつの提言を行っている。そこで唱えられたのは、グローバル・ミュージアムという、「異文化」と「自文化」を包摂するミュージアムの一つのあり方について吉田氏の私見である。ここで登場するのが冒頭で述べた「テンプル」と「フォーラム」の考え方である。「テンプルとしてのミュージアム」というのは、要するに、19世紀までのミュージアムのありかたである。ミュージアムは、歴史的に見れば、教会や王侯貴族による珍品の収集に始まり、ヨーロッパの植民地支配の拡大とともに成立してきたものである。とくに人類の遺産を一堂に集める伝道としてのグローバル・ミュージアムは、その動きの頂点に位置づけられる。この種のミュージアムでは、どこまでいっても植民地主義の匂いを払拭することができない。今、アフリカの人々やアメリカの先住民たちが異議を申し立てようとし

ているのは、そうした特定の国が世界中の「至宝」を一手に所有するという所有のありかたに對してである。いまさら、もうひとつの大英博物館も、第二のルーヴル美術館もいないということである。さらに、「テンブルとしてのミュージアム」には、もうひとつ課題がある。「テンブルとしてのミュージアム」というのは、人々に良く知られた「名宝」「至宝」を拝みに行く場所であるから、そこへ行く人々は、そこに何かがあるかをあらかじめ知っていることになる。ただ、自分でそれを見たことはないかもしれない。だから、それを見に行くというわけである。よって、そこには新しい発見はあまり期待できない。そこから新しいものは生まれてこない。既成の価値観が強化されるだけであるというのだ。もちろん、既成の価値の強化というのも、ミュージアムの重要な役目ではある。しかし、そのためのミュージアムというものは、近代を通じて、ヨーロッパが、アメリカが、そして日本が、懸命に作ってきたものにほかならない。そして、今、アジアやアフリカでも、そうしたミュージアムが続々と作られてきている。この種のミュージアム(ナショナル・ミュージアムやリージョナル・ミュージアム)はこれからも存続していくであろうし、それぞれの文化の記憶を集め、次代に継承していくという作業の重要性は、今後も失われることはないであろう。ただ、これから新しいミュージアムを築き上げようというとき、「テンブルとしてのミュージアム」をもうひとつ作る必要はない。ここで登場するのが「フォーラムとしてのミュージアム」である。

では、吉田氏が提唱する「フォーラムとしてのミュージアム」についてもう少し深く説明することにする。氏はここで情報の十字路口、あるいは結節点という言葉を使っている。そこへ行けば情報が集まる。だから、人も集まる。ただ、その情報は、人とともにどこまでも広がっていく。しかも、そのような情報の十字路口は、世界中のさまざまな場所にあってよい。このような

ネットワークのなかの情報の十字路口としての拠点なら、世界の人々によってこれからも求められていくものになる。すなわち、「フォーラムとしてのミュージアム」というのは、そのような情報の十字路口の具体的装置としてふさわしいということを氏は考えているのである。

3 — おわりに

本書では、民族誌展示を手がかりに、民族学博物館のありかたの変遷が批判的に検討されてきた。その過程で、民族学博物館の抱える問題は、まさにその民族学博物館を他のミュージアム、とりわけ近代美術館と区別するという、思考のありかたそのものに由来することが明らかになったとしている。結果として、本書の議論は、最終的には、民族学博物館における民族誌展示のみならず、ひろく博物館・美術館における「文化」の展示一般を射程におさめたものとなった。それを通じて、現代のミュージアムにおける「文化展示」の要件も、ある程度は明らかになったといえよう。

科学や普遍的とされる価値を背景に固定的な表象を一方的に生み出すという、これまでの博物館のあり方に対する見直しは、今、各所で進んでいる。展示される側との共同作業を前提とした展示の実現、住民参加を基調とするコミュニティに根ざした博物館活動の実践、観客の記憶の想起を重視する歴史展示の実施、さらには、博物館に所蔵されるモノの情報を、それをもとと生み出したコミュニティの人々を含め、より多くの人々と共同で充実させ活用していこうとするデータベースの構築。このいずれもが、これまで一方的に情報を発信するという権力的装置であった博物館が、双方向・多方向の交流と上流の流れを生み出すものとして改めて活用されてきていることを示している。その根底にあるのは、博物館と

いうものは、その所蔵品の最終的な所有者でなく、むしろ「管理者(Custodian)」であり、本来の制作者や所有者、利用者とのあいだでのさまざまな共同作業をおこなう場だという認識である。これが、吉田氏の提唱する「フォーラムとしてのミュージアム」そのものなのだと考える。

本書は、特に美術史・美術館側の立場にいる方には、民族学博物館と同じ舞台上上げられて議論がなされていることに、違和感を覚えるかもしれない。しかし、一貫して民族学博物館と近代美術館の区別を問題にしてきた本書を読んで、アーカイブズにも同様の課題があるのではないかと考えた。例えば公文書館・文書館と歴史系博物館(郷土資料館を含む)との不協和音である。ここには大学・民間アーカイブズも絡むであろう。これもまた異文化交流のひとつでないだろうか。また、本書で挙げられていた展示会の事例などは、アーカイブズ学においても応用できるものがあるであろう。

最後に、本書のタイトルには「驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで」とあるが、ヴァーチャル・ミュージアムについては、コレク

ションのないミュージアムはデジタル・ミュージアム、ヴァーチャル・ミュージアムと一体のものであると述べている。そして、現実空間での「対話」だけでなく「対話」を可能にするものとして、フォーラムとしてのミュージアムにも不可欠であるとしている。ただしデジタル・ミュージアムだけではできない経験は大きく2つある。ひとつはものと現実の接触、もうひとつは人との実際の接触である。「驚異の部屋」に対して、ヴァーチャル・ミュージアムに関する記述が通り一遍のものに終わってしまっているのは残念である。氏の提唱するフォーラムとしてのミュージアムをわかりやすく伝えるには、この部分にも紙幅を割く必要があったであろう。

文化人類学においてもアーカイブズという言葉が聞かれるようになった。自身は現在、人類の文化的な遺産の継承について研究しているが、文化を表象することの手段にはアーカイブズ化も含まれていると考える。物事をどの立場から見る(つくる)かで展示もアーカイブズもまったく違ったものになり得る。本書からはそれを改めて学ぶことができた。

1 — Cameron Duncan, 'The Museum: a Temple or the Forum', *Journal of World History* 14, no.1, 1972, pp.189-204
キャメロン氏のこの見解は、博物館や美術館についての批判的検討が活発化するより以前に発表されたものである。その見解は、1988年9月にスミソニアン研究所国際センターで開催されたシンポジウムにおいて、ステイヴン・ラヴァインとアイヴァン・カーブが引用し、その発表が両者の編による報告書「文化を展示する — 表象の政治学と詩学」(Ivan Karp and Steven D. Lavine (eds.), *Exhibiting Cultures: the Poetics and Politics of Museum Display*, Smithsonian Institution Press, 1991)で公刊されたのをきっかけに、あらためて注目を集めるようになった。(著者注より)。

2 — 日本の人類学は明治初期に遡る。発端はアメリカの動物学者モース(Morse, E)が、1877年に大森貝塚を発見したことで、彼の発見と主張は当時の日本の知識人の関心を、日本人の起源や日本文化の源流といった問題に向けた。なかでも坪井正五郎は1884年に「人類学会」という名の会を作り、考古学を含む広い観点から、人類全体を研究することを提唱した。今日この学会は、「日本人類学会」として受け継がれ、主に自然人類学者をメンバーとしている。坪井に師事して人類学を学び、沖縄、台湾、朝鮮、中国、シベリア、モンゴルなどで民族調査をしたのが鳥居龍造である。鳥居の調査は19世紀末から20世紀初頭にかけて行われたが、その頃日本は東アジア諸国を植民地化して、太平洋地域にも進出し始めていた。第一次世界大戦で勝利した日本は、南洋諸島の多くを統治下に置いたが、今日、この歴史は文化人類学にとって負の遺産となっている。海外で現地調査をするためには、それを可能にするだけの政治力や経済力が必要だが、戦前の日本は欧米列強がそうであったように、その基盤を帝国主義と植民地主義に置いていたからである。人類学の植民地ルーツが語られるゆえんであるが、この点について、ほとんどの西洋産の学問には同様のことが言える。人類学はこうした知と権力にまつわる問題を受け止め、反省して発展してきた学問である。

3 — 参考文献として山下晋司・船曳建夫編「文化人類学キーワード[改訂版]」(有斐閣、2008年)を挙げる。

4 — サントリー学芸賞の選評より。
http://www.suntory.co.jp/sfnd/prize_ssah/detail/2000gb3.html(アクセス:2014年9月29日)